



町村さんの講義は農場に併設されているカフェで。木のぬくもりが感じられる建物は観光客にも人気だ



北海道

国を支える地域開発

かつては未開の地ともいわれていた北海道。政府主導で150年前から総合的な地域開発が進められ、今の姿にまで発展した。その経験には、開発途上国が取り組む地域づくりのヒントが隠されている。



町村農場に併設されている直売店。陳列やパッケージにも工夫が凝らされている

オーダーメイドの地域づくり

一面に広がる荒地だが、わずかに150年のうちに、見違えるような土地へと生まれ変わった。そんな奇跡の変ほうを遂げた地域が日本にある。明治時代、屯田兵などにより開拓が始まった北海道だ。「寒い！もう冬が近付いているんですね」

道内最大の人口、約190万人を抱える札幌市内。バスに乗り込む一行から、そんな声が聞こえてきた。北海道はすでに紅葉の季節。10月から約1カ月、アジアやアフリカ、中東などから研修を受けにきた地域開発担当の行政官たちだ。

この街のシンボルの一つ、碁盤の目に区切られた市内をくぐり抜け、バスに30分ほど揺られると、そこには北海道らしい風景が広がっていた。目的地は隣町の江別市。人口は札幌の10分の1にも満たないが、札幌のベッドタウンとして注目されている地域だ。「私たちも石狩市からここに移ってきたんですよ」。そう話すのはこの日の視察先、株式会社町村農場の町村均代表取締役。創業96年、道内に4店舗、東京、横浜、大阪にも店舗を持つ地元有力な乳業メーカーだ。

北海道では、畜産や酪農は重要な産業。第二次世界大戦後、国が

ていくという方針だ。

しかし、主力商品である牛乳やヨーグルトは単価が低く、安定的に儲けるのはそう簡単なことではないようだ。「ビジネスとして成功させるには、他社との差別化と付加価値が必要です」。実際に町村農場の商品は、観光客はもちろん、乳製品には舌の肥えている北海道民にも人気だ。

農場見学の後には、農場に併設されているカフェで質問タイム。「実はここを継ぐつもりはまったくなくて、東京でサラリーマンをしていたんですよ。今や、農場経営一本！」にしか見えない町村さんの発言に、研修員たちも驚きを隠せない様子。「でも急に事情が変わって、北海道に帰ってくるようになって。どうせやるなら地元を盛り上げたいと、必死でここまできました」。そう静かに熱く語る町村さんの話に、研修員たちは自国の状況を重ねているようだった。「地域を支える一人一人のアイデア」と思いが重なる、北海道は一つの地域として成長してきたんですね」と研修員たちはうなずいていた。

もちろん、地域開発といっても、国ごとに、地域ごとに状況が違う。「コレ」といった正解があるわけではない。そこで約1カ月にわたる研修では、札幌や江別はもちろん、石狩や夕張、さらに道外の岐

町村さん(右端)の説明を聞く研修員たち。それぞれの国の事情を重ね合わせながら、地域開発のカギを探る



阜県郡上市など、多くの地域を視察に組み込んだ。「日本も戦争や災害などを経験しながら、試行錯誤を経て、今の姿をつくり上げてきたということが分かりました。その土地、その時代に合った方法をきちんと考えていく必要があるんですね」と、まさに今、復興の真ただ中にあるイラク計画省のダヴォド・アラール・アバシ・ダウオドさんは話してくれた。

そして、この20年続く研修を取りまとめるのは、地域開発の最前線にいる国土交通省北海道開発局。「実は、私たちが研修員たちから学ぶことも多いんですよ」と同局開発監理部開発計画課国際室の柴田哲史室長。長年にわたる紛争などを経て、ここ数年で新しい国づくりをスタートした国も多い。明治時代から地域開発に取り組んできた北海道よりも、いわゆる「最新」の制度が導入されているケースもある。「それぞれの地域の現状と照らし合わせながら、開発の仕組みを機能させていく手法を考えることが大切」と柴田室長は強調していた。

途上国の地域開発の道のりは長い。しかし「ゼロからのスタートは大きなチャンスでもある」と研修員たちは意気込む。自国から遠く離れた北の大地で、地域開発に必要なキラリと光るヒントを見つけたようだ。



この日の午前中は北海学園大学工学部の鈴木聡士教授による講義。関東大震災後の東京の地域開発などについても学んだ